



20世紀初頭の中国における印刷技術の近代化とその 月[フン]牌への影響 : 『申報』の記事と広告を基本 資料として

于曉[二]

(Citation)

表現文化研究, 10(1):1-17

(Issue Date)

2010-11-15

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD01)

<https://doi.org/10.24546/81002909>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002909>



20世紀初頭の中国における印刷技術の近代化とその月份牌への影響 —『申報』の記事と広告を基本資料として

The Impact of Modern Printing Technology on Yuefenpai in China at the Beginning of the 20th Century, Seen in the Articles and Advertisement in *Shenbao*

于曉妮 Yu Xiaoni

概要

20世紀に入ると、ますます激化した内外の憂患が、清王朝政権の崩壊を加速した。それと同時に、中国の知識人たちは、西洋の科学技術を受動的に受け入れるだけでなく、国を救う方法を自ら求めようとして、より積極的に西洋の近代的な政治思想や国家制度に目を向けるようになった。このような激動の時代における上海にあって、新たな大衆媒体として月份牌が広告の舞台に登場してきた。

近年、月份牌に対する関心が高まっている。しかしながら、清末の出現当初の船舶スケジュール暦としての社会的役割をもった月份牌から、20世紀の最初の約20年間に発達する大衆向けられた広告としての月份牌までの変容の経緯を例証した研究は少なく、とりわけ、印刷技術の進歩が与えた影響という角度から月份牌が分析された研究は皆無に等しい。これまでの研究は、その殆どが、あたかも一個の「美術作品」であるかのように月份牌を見なし、画面上に現れた構成や図像に関する分析に集中する傾向にあり、さらにそのことは、出現から発展へと至る歴史的背景や社会的文脈から月份牌の実像を切り離し、矮小化された月份牌理解を招いてきたといえる。

本論文は、20世紀初頭の中国において月份牌が大衆にとっての新たな関心となっていく過程に着目し、なかでも、多色石版印刷からコロタイプをへてオフセットに至る近代的な印刷技術が月份牌にどのように影響を及ぼしたのかという観点から論じられている。具体的には、月份牌の「作り手」として、中国側の商務印書館と日本側の精版印刷株式会社のふたつの印刷業者を取り上げ、一方、その「使い手」として、中国人企業家の黄楚九に着目し、当時上海で発刊されていた日刊新聞『申報』に掲載された記事と広告を主として使って、月份牌が単なるカレンダーから商業的広告へと変容する過程を明らかにしている。

キーワード: 月份牌、石版印刷、コロタイプ、オフセット、商務印書館、精版印刷株式会社、黄楚九

Abstract

At the beginning of the 20th century, the Qing Dynasty was facing the domestic and external problems and accelerating the speed of its collapse. At the same time, the intellectuals in China came not only to accept the science and technology of the West passively, but also to pay attention to a modern political thought and a national system of the West more positively, trying to find out a way of saving China. In such a situation, Yuefenpai appeared in the advertisements as a new popular medium in Shanghai.

These years, people show great concern for Yuefenpai. However, there are few researches on how Yuefenpai turned a popular medium of advertisements during the first 2 decades of the 20th century, which appeared as ship schedule calendars at the beginning. In particular, there are almost no researches on whether the development of printing affected the using of Yuefenpai. Up to now, most researches on Yuefenpai tend to analyze the composition and the chart image that appears on Yuefenpai, taken as 'Art works'. Such researches are separated from the historical and social background of the appearance and development of Yuefenpai, at last leading to a trivialized understanding of Yuefenpai.

This research pays attention to the process how Yuefenpai turned a new concern of the general public in China at the beginning of the 20th century, and discusses how modern printing technique influenced Yuefenpai, taking 2 printing companies (The Commercial Press in China and Seihan Printing Co. Ltd. in Japan) as examples. Moreover, the process of how Yuefenpai turned commercial advertisements from calendar is to be discussed, based on a Chinese national enterpriser Huangchujie's advertisement on a daily newspaper, *Shenbao* in Shanghai.

Keywords: Yuefenpai, Lithography, Collotype, Offset, The Commercial Press, Seihan Printing Co. Ltd., Huangchujie

はじめに

月份牌は、最初は、外国の船舶会社が中国で業務展開をするにあたって、西洋の暦と中国の暦とを相互に転換する役割を背負った商品として、清末に上海に出現した。20世紀に入ると、ますます激化した内外の憂患が、清王朝政権の崩壊を加速した。それと同時に、中国の知識人たちは、西洋の科学技術を受動的に受け入れてだけでなく、国を救う方法を自ら求めようとして、より積極的に西洋の近代的な政治思想や国家制度に目を向けるようになった。この時期、近代的な科学や工業、政治や経済などの様々な領域に関する書籍が大量に中国に紹介され、他方、官費や私費による留学生も次々と海外へ留学していった。

このような社会的背景にあって、近代技術のなかでも、とりわけ近代的な印刷技術の中国への輸入が、最も切実な要求となった。印刷技術、特に多色石版印刷技術の進歩は、より精巧な月份牌を制作することを可能にした。そして、1903年、イラ・ワシントン・ルーベルがオフセット技術を開発し、1906年にオフセット印刷機がハリス自動印刷機械製造会社によりアメリカで制作された¹。それまでの直刷りと違い、オフセット印刷は、版より弾力性のあるゴムから紙に印刷するため、安価なザラ紙にもきれいに印刷できるし、紙よりも柔らかいゴムに転写するため、版の摩耗が抑えられ長持ちする。そして版を作るときに原画(原稿)を反転させなくていい。このいくつもの特徴を持つオフセット印刷は急速に普及した。一方、中国の民族企業が、政治と社会のこの激動期のなかで創設されていった。本論のなかで分析しているように、この最初期の中国人企業家たちは、外国企業との激しい競争のなかで広告に対する関心を持ち始めた。月份牌は、新しい広告の媒体として脚光を浴びることになった。つまりこのとき、月份牌の「作り手」(印刷業者)と「使い手」(企業家)の両方が、揃ったのである。

本論文は、月份牌の「作り手」として、中国側の商務印書館と日本側の精版印刷株式会社のふたつの印刷業者を取り上げ、一方「使い手」として、中国人企業家の黄楚九に着目し、月份牌が単なるカレンダーから商業的広告へと変容する過程を、主として『申報』に掲載された広告と記事を基本資料として、例証することを目的としている。

1. 商務印書館における日本の印刷技術の導入と月份牌への影響

印刷や出版を業務とする商務印書館は、光緒二十

三年(1897年)に、夏瑞芳、鮑咸恩などの7人により上海で創設された²。創業当時は、簡単な小型手動式の印刷機2、3台しかなかった。1900年、同館は、同じ上海で活動していた日本資本の修文書館を低価格で買収し、規模を拡大した。同時に業務内容も、印刷と出版の分野から、さらに印刷材料の小売りの分野へと拡張された。そして同館は、光緒二十九年(1903年)に日本の金港堂と合併し、2年後の1905年には正式に株式会社として改組し、強大な組織となった。この合併は、資本の面においても、また技術の面においても、同館に大きな転機をもたらした。そのことは、結果として、それまで中国の印刷技術をリードしていた点石齋印書局を圧倒することになった。

合併する1年前の明治35年(1902年)、日本では、いわゆる「教科書事件」が起きている。この贈収賄事件は、20社以上の国内の出版社を巻き込み、100名以上の者に有罪判決が下され、その後の国定教科書制度のきっかけとなるものであった。実は、金港堂自身も、この事件に関与していた出版社のひとつであった。したがって、1903年のこの商務印書館と金港堂の合併は、残されている資料が少ないために、必ずしも判然とはしないが、日本の側からすれば、贈収賄に関与していたがために日本での活動が狭められていた人たちを中国に送り込むメリットがあり、そして一方、中国の側からすれば、日本の資本と技術を導入するメリットがあったといえる。そうした背景のなかで、長尾太郎と小谷重は、事件の後に、商務印書館で中国の教科書編集の仕事に携わることになる。とりわけ長尾は、1914年までの長きにわたり、商務印書館で仕事をした。

『申報』は、この「教科書事件」について1ヵ月半にわたり継続的に報道した。このことからして、当時の中国においても日本の「教科書事件」がかなりの影響をもたらしていたことが想像できる。各々の記事の分量はそれほど多くはなかったが、金港堂の名前は頻繁に登場し、同社元社長の原亮三郎、その父親である原亮一郎、重役の小谷重なども実名でもって報道されている³。そして報道の口調から見れば、『申報』は、金港堂をはじめ、事件に関連する各会社及び官僚に対するかなり批判的な評価を行っていた。

そのため、金港堂と商務印書館のこの合併は、商務印書館にかなり有利な条件での合併となった⁴。日本側は、10万元の資金を出した。商務印書館は総資産を5万元とし、さらに現金5万元を追加して、10万元にまで補足した。合併初期は、日、中双方各々理事2人を指

定し理事会を結成した。日本側は、原亮一郎と加藤駒二、中国側は、印有模と夏瑞芳である。しかし、1907年には理事会5人のうち中国は3人、日本は2人。1908年には理事会3人のうち中国は2人、日本は1人。1909年には、理事会の7人が全員中国人となった。日本人理事の人数が減った理由として、ふたつのことが考えられる。ひとつには、中国側が続けて増資することにより、商務印書館における日本側の資金比重が次第に減っていったこと。もうひとつは、新政府の新しい法令により、合資会社では外国人が理事になることが禁止されるようになったことである⁵。中国側は日本投資者を計画的に理事会から排除しながら、さらには、日本人の顧問や技師を随時に解雇できる権限を持つことが合弁条件のひとつとして出されていた⁶。商務印書館の創立者のひとりである高翰卿も1992年刊行の『商務印書館九十五年——我和商務印書館』のなかの「本館創業史——在發行商所學生訓練班的演講」において、商務印書館が日本の印刷会社である金港堂と合弁した理由に関して、「一時的な措置であり、ひとつには、外国人の知識を利用して印刷技術を学ぶためであり、もうひとつには、外資を借り入れることにより資本を充実させるためである」⁷と述べている。商務印書館の規模は、この合弁によって、金港堂の資金と技術を十分に利用して増強されたものの、会社の政策決定権や経営権を一切日本側に渡すことはなかった。この合弁においての商務印書館と金港堂の位置関係は、光緒三十一年(1905年)に『申報』に掲載された商務印書館の以下の広告からも見ることができる。この広告は、金港堂との合弁について全く触れられていないばかりか、金港堂の名前さえ挙げていない。代わりに、日本の印刷技術を輸入したことを堂々と述べている。

欲印五彩地圖、銀錢票、月份牌及照相銅版者鑒
本館現從日本東京聘到精做五彩石印、照相銅版工師十余人、制出各件極蒙大雅嘉許。各省官商如有欲做以上各件者、務請光臨。無不價廉物美、以副雅意。伏乞垂鑒。 上海商務印書館⁸

カラー地図、有価証券、月份牌及び写真銅版
(を使った印刷物)を印刷したい方への朗報

当館は、昨今日本東京から多色石版印刷、写真銅版に熟練した技師を十数名招聘しました。制作された作品は、いずれも素晴らしいものであり、有識者に大いに称賛されました。各省の役所また民

間企業において、もし上記の印刷物を必要とされる場合は、どうぞこちらまでいらしてください。安くて品質が良く、必ずご希望に沿うことと思います。是非当館にお出かけください。 上海商務印書館 [広告1]

1931年の商務印書館刊の『最近三十五年之中国教育』に所収されている賀聖鼐の「三十五年来中国之印刷術」によると、20世紀の初めに上海で発行されていた多色石版印刷の月份牌は、「どれも英商の雲錦公司によって原稿がイギリスに送られ、現地の多色石版印刷会社で印刷されたもの」⁹である。一方、中国における最初の高精度の多色石版印刷は、その後の光緒三十年(1904年)に文明書局によって行われることになり、その技術は「中国人が日本の技師から教わった」¹⁰もので、「印刷された図案は、色彩や明度の濃淡が鮮明であり、もともとの古い原画とほとんど見分けがつかない」¹¹ほどであった。さらに同書によれば、その後の光緒三十一年(1905年)に商務印書館は、和田樞太郎、細川玄三、岡野、松岡、吉田武松、村田及び豊室らの日本技師を招き、彼らから多色石版印刷の技術を習得していたと記述されている¹²。

『申報』に[広告1]が掲載された時期(1905年)と「三十五年来中国之印刷術」の記述にある日本人技師が商務印書館に派遣された時期(1905年)とが一致することにより、この時期(1905年)を起点として、和田樞太郎や細川玄三といった日本人の技師たちが持ち込んだ多色石版印刷が、月份牌に適用されたものと考えられる。さらにこのふたつの資料から、この時期以降、月份牌は英国ではなく中国において印刷されていくことがわかる。

このようにしてできた月份牌が、中国におけるはじめての多色石版印刷による月份牌であった。高翰卿は、合弁後「日本から技師が派遣され、写真製版、原版製版——銅版製版、ツゲの木彫り版等の多色印刷技術が持ち込まれ、これまでわれわれにはなかった技術のすべてを習得することができた」¹³と、自社の印刷技術の向上を回想し、さらには、「特に多色石版印刷は、当時の中国にはまだなかったものである。今日、人々が知る精巧かつ華美な月份牌もその多色石版印刷であり、我が社は中国でそれを製版印刷した第一人者でもある」¹⁴と、証言している。

先ほど紹介した賀聖鼐の「三十五年来中国之印刷術」によると、日本人を通して伝わった多色石版印刷技

術には、2種類があった。ひとつは「光石法」(磨き石版)で、もうひとつは「毛石法」(砂目石版)である。「光石法」はおおよそ次のとおりである。まず、転写紙やゼラチンシートに先の尖ったペンのようなもので原図の輪郭線や色の境界部分を詳細になぞり、それをインキでよく磨いた石版に転写して捨て版を作る。その捨て版を、色の数に応じた数の艶紙に印刷し、さらに紅殻粉を用いて必要な数だけ原版に転写する。その後、原図を見ながら原版で各色の濃淡をつけ、順番に色を印刷することによって、カラーの印刷物が完成する。「ぼかし」の表現を要する箇所では、ふたつの方法が用いられた。ひとつは、同じ大きさの点を使う場合には点の密度を少しずつ変化させることによって「ぼかし」を表現し、いまひとつは、用いる点の大きさそれ自体を変えることによって「ぼかし」の効果を得ようとするものであった。

「毛石法」は「光石法」とほぼ同じ手順で製版がなされるものの、石版の表面に金鋼砂でざらざらとした砂目をたてておき、尖ったペンを使わずに、ゼラチンシートとクレヨンを用いて製版する。そのため、「ぼかし」はコンテチョークや木炭を使った効果と大きな差はなかった。

日本人の技師たちが当時もたらしたのは、多色石版印刷技術だけではなく、その他の最新の印刷技術や教科書の編集方法、さらには洋本書籍の装丁法なども含まれていた。こうした広い意味での技術移転が、商務印書館の新しい血となり肉となり、同館の発展に貢献した。それからほぼ10年がたったのちの商務印書館の様子については、次の調査報告書に詳しく述べられている。これは、大正4年(1915年)に大阪の中田印刷所の中田印刷所の大澤克と中田良夫の二人が上海の印刷事情について行った調査をまとめたものであった。

上海には御承知の通り我が東京の博文館のような組織を有してゐる商務印書館と云ふ印刷所がある、面積に於ては我が博文館よりも遙に膨大である、そして印刷ばかりでなく印刷機械から、紙、インキその他の印刷材料に至るまで営業をしてゐる、丁度印刷のデパートメントストアーと云ふものだ¹⁵。

さらに同報告書では、商務印書館が所有する印刷機械までも列挙しており、それをまとめると【表1】となる。

この表から、当時の商務印書館がかなりの印刷能力を有していたことがわかる。印刷や製本に関わる機械は、初期に日本から輸入した機械、アメリカから輸入し

たオフセット印刷機、ドイツ、イギリスなどのヨーロッパの国々から輸入した機械となっている。報告書のなかで中田良夫らは、「工場の設備は内地(日本)と殆ど変わりが無い、中には内地よりも一層進歩したところがある」と分析し、さらには、「こころ一つ奮発せ[ママ]ないと支那に後れるように思ふた」¹⁶と、驚嘆している。

こうして商務印書館は、積極的に諸外国から印刷技術や印刷機械を輸入して、中国における近代の印刷事業の発展に大きな貢献をなした。残された作品が極めて少なく、同時に年代を特定するうえでの根拠となるものが不足している現段階においては、その前後の具体的な作品を対照して例証することはできないが、これらの技術と機械により、月份牌にもこの時期新たな変化が生じたことは疑いを入れないであろう。

大正2年(1914年)には、日本の印刷界においても、月份牌は注目されていた。

[……]月份牌と云つて恰度我国の商人が新年に華客へ送る柱暦の様な種類のもので精巧華美な大形石版物がある。[……]前に云つた月份牌は非常に華麗を尊重するもので、尤も綺麗に仕上げねばならぬ必要からインキは大抵独逸製の優良品を使つて居る¹⁷。

この時期の月份牌の印刷に用いられた技術は、すでに述べたように、日本から導入された近代的な多色石版印刷に関する技術であった。そして、この引用からもわかるように、インキもまた、高い画質を得るために、ドイツ製の優良品が用いられていた。また、月份牌は「大形石版物」(菊全判)であり、そのために、高性能の印刷機械が求められたと推測される。こうして、20世紀の10年代の半ばまでにあつて、月份牌は、質において大きな飛躍的発

表1 1916年の商務印書館における主要機械の配置状況(単位:台)

印刷部		写真部	
活版ロール三十二頁	60	全版カメラ機	1
平版ミシン菊全	1	半折	1
四六半截	5	4つ折り	4
アルミ版四六全紙	1		
オフセット自動紙差付	1		
凸版機	4		

(執筆者による作成)

展をとげたといえるのではないだろうか。

2. 精版印刷株式会社と月份牌の印刷

中国資本の商務印書館だけではなく、日本の印刷会社も積極的に中国に進出して、月份牌を印刷している。精版印刷株式会社はそのひとつである。

印刷業界の専門誌『大阪印刷界』（後に『日本印刷界』と改名）において、精版印刷株式会社の社名が頻繁に登場することから判断して、同社は当時の日本の印刷業界においてかなりの影響力を有していたものと推定できる。しかしながら、同社を知るうえでの現存する資料はきわめて少ない。以下に、執筆者が入手した貴重な資料のなかのひとつである、昭和4年（1929年）に発行された『精版印刷株式会社ノ現況』¹⁸をもとに、この会社について簡略に紹介したいと思う。

精版印刷株式会社は、明治38年（1905年）に日本精版印刷合資会社として創業し、大正5年（1916年）に「アルモ」印刷合資会社と合併して日本精版印刷株式会社を設立し、大正10年（1921年）に上海出張所を拡大して、上海に工場を設け、さらに、大正12年（1923年）に市田オフセット印刷株式会社と合併し、そのとき精版印刷株式会社と改称した¹⁹。

『精版印刷株式会社ノ現況』が発行された当時（昭和4年）の精版印刷株式会社は、資本金3百万円、従業員1378人の大企業であった。そのうち上海分工場は、事務員26名と職工536名で構成され、職工の内訳は94人の日本人と442人の中国人であった。そして、この上海分工場の昭和3年度の1年間の印刷枚数は、1億944万1795枚で、売り上げ高は2431005.40円に上っていた²⁰。上海工場の住所は「齋齋哈路4号」と記述されているが、当時の地図にはこうした表記は見当たらず、したがって、おそらく「齋齋哈爾路」の間違いではなかったかと思われる。「齋齋哈爾路」は当時上海の共同租界にあり、周囲には日本系企業が多数存在していた【図1】。

さらに同じく、『精版印刷株式会社ノ現況』によると、当時の上海分工場は、次のように記述されている。

大正三年上海ニ出張所ヲ設ケ、南洋兄弟煙草会社及英米トラスト煙草会社等ヨリ大量ノ注文を獲得セリ、殊ニ欧州戦乱勃発ト同時ニ益々注文品殺到シ、一時中支方面ニ於ケル欧米印刷物ヲ駆逐スルノ盛況ヲ呈シタリ。茲ニ於テ年来ノ懸案タル支那ニ於ケル邦人経営ノ先驅タラントシ、且ツ在支

事業経営ガ内地ニ比シテ、遙カニ有望ナルコトヲ考察シ、大正十年四月上海共同租界ニ土地及工場ヲ買収シテ、米国ヨリ新ニ新式オフセット印刷機拾数台ヲ輸入シ、同年九月設備完成創業ノ運びニ至レリ²¹。

精版印刷株式会社は、上海をはじめ、天津、青島、漢口など、中国の主要都市にある大手企業と業務提携を結んでいた。特に英米煙草公司（英米トラスト）、花旗煙公司（米商）、三興煙公司（華商）、大東南煙公司（華商）、中和煙公司（華商）、スタンダード石油会社（米商）、テキサス石油会社（米商）、南洋兄弟煙草会社（華商）、華成煙公司（華商）、華達煙公司（華商）、瑞倫煙公司（華商）、主義煙公司（華商）、サンメード乾葡萄公司（米商）、ライジングサン石油会社（英商）、カラザス・ブラザーズ商会、東亜煙草株式会社、山東煙公司（華商）などの会社と取り引きをしていた²²。

『精版印刷株式会社ノ現況』には、さまざまな種類の印刷物の見本が多数掲載されているが、「ポスター類」の見本のひとつとして、南洋兄弟煙草有限公司の社名入りの月份牌が紹介されている【図2】。このことから、日本の精版印刷株式会社が煙草のパッケージのみならず、月份牌も印刷していたことが明らかにわかる。また、同書に掲載されている「意匠室」という題名の写真では、背景に見られるイーゼルに月份牌の原画らしきものが置かれている【図3】。この原画が日本で日本人画家によって描かれたものであるのか、あるいは、中国で中国人画家によって描かれ、その後日本に運ばれ、それをもとに製版されようとしているものであるのか、残念ながら、詳しいことはわからない。ただ、この原画にはまだ社名や商品名が書かれていないことから、少なくとも、商業ポスターになる最後の工程が、当時日本において行われていた可能性は十分にあるのではないだろうか。【図4】は精版印刷株式会社が印刷した月份牌の一枚である。

大正5年（1916年）に日本精版印刷合資会社は第2回広告画面案懸賞募集を主催した。そのとき、南洋兄弟煙草会社の月份牌が、第3等第1席を受賞した【図5】。この月份牌を描いたのは、江蘇省出身の周柏生であった。周柏生は、本名を周桐といい、著名画家周彬の息子である。周柏生は宮廷画師の黄山寿を師とし、古装人物画にも造詣が深く、1917年に南洋兄弟煙草公司広告部に入社し、同社をはじめ華成煙草公司や華美煙草公司等の会社のために月份牌を描いた画家である²³。

一方、【図6】は、『日本印刷界』（第77号、大正5年3

月)に掲載されている月份牌である。この図版のキャプションには、「支那向最新ポスター」と書かれ、その下に括弧に入れて、「現物多色オフセット、菊全判」と注釈されている。ところで、このキャプションには、ややもすれば見落としがちであるが、きわめて重要な用語がふたつ使われている。それは、「ポスター」と「オフセット」という用語である。

まず、「オフセット」。すでに述べてきたように、日本の印刷会社である金港堂の技術者たちによってもたらされた多色石版印刷の技術によって、1905年以降、月份牌の印刷は中国において飛躍的に発展したと思われる。商務印書館が1911年に『申報』に出したある広告では、多色印刷を用途との関連において、次のように説明していた。

上海商務印書館代印印刷各件廣告

[……](三)五彩石印 各種彩画可照原様印刷與画無異。(四)三色版以青黄紅三色配合可至數十色極爲精美。(五)玻璃板 字畫之深淺濃淡與原本無絲毫之別(凡五彩月份牌 五彩地圖 個色套印文憑 股票 息單 商標 防單 名人書畫字帖 美術明信片等件用此最宜)²⁴。

上海商務印書館は各種印刷品を印刷する広告[……](三)多色石版印刷は各種の色彩図画を原図のように印刷することができます。(四)三原色版は青(シアン)、黄(イエロー)、赤(マゼンタ)の三色の配合で数十色を印刷することができ、とても精巧かつ華美です。(五)玻璃版は文字、図画の濃淡を原本通りにすることができます。(色彩月份牌、色彩地図、各色の証明書、株証券、利息書、商標、ラベル、名人書画、書法本、絵葉書等は、これを使うのが最も適切です)。^[広告2]

この広告では、当時商務印書館の多色印刷方法が、「五色石印」「三色版」「玻璃板」の3つに分けられて紹介されているようにも読めるが、しかし実は、石版印刷は平版印刷の代表として、一時期平版印刷の代名詞にもなっており、ここでは、「五色石印」と書いてあるが、本当は多色平版のことを指しているのではあるまいか。そして、この新しい平版印刷のことを「製版方法」(三色版)と「印刷方法」(玻璃板)のふたつの観点から紹介しているように読めるのである。したがって、この広告で紹介されている印刷法は、より正確にいうと「写真平版コ

ロタイプ印刷」なのである。

1868年にフランスのL・オーロンが色の三原色である黄、赤、青によるカラー写真原理を考案し、カラーフィルターを使って、色を分解して表現する技法が導入された²⁵。広告中に記述されているように、この方法は数十色も使わなければならない多色印刷物が、ただの3色で同じように見せることができる。この広告のなかで言及されている「三色版」は、写真技術が多色印刷の製版に応用されていることを示している。写真製版は、光学的で機械的な方法であり、描き版のような人の手技に頼る方法より、効率がよく、そして職人に対する技術的要求を大幅に下げる利点がある。そして「玻璃版」はまたコロタイプ印刷ともいい、磨きガラス板に感光性ゼラチンを塗布し、図柄はフィルムで露光して形成する。光にあたると硬くなり吸水性が低くなるゼラチンの性質を利用して、インキの量を調整して印刷する。この方法は、平版と凹版の合わせ技であり、最も原画に近い画質が出せる。しかし、印刷の精度が高いが、耐刷性の低さに弱点があり、ひとつの版では最大数百枚しか印刷することはできない。今では美術館などに納める美術品コレクションの複製以外に用いられることは殆どないが、その当時月份牌の印刷に使われていたのは、この広告から明らかである。【図7】は、コロタイプ印刷による月份牌である。

この[広告2]に見られるように、1911年の商務印書館は、耐刷性が低いにもかかわらず、この「石版写真平版コロタイプ印刷」を多色月份牌に最適な印刷法と宣伝していた。一方、1915年になると、商務印書館は、アメリカからオフセット印刷機を輸入し、技師の魏拔(George Weber)を招いたという記録が残っている²⁶。オフセット印刷は、それまでの直刷りと違い、完成した版面を一回ゴム胴に転写して、それをさらに紙に転写する【図8】。「版より弾力性のあるゴムから紙に印刷するため、安価なザラ紙にもきれいに印刷できる」、「紙よりも柔らかいゴムに転写するため、版の摩耗が抑えられ長持ちする」及び「版を作るときに原画(原稿)を反転させなくてよい」²⁷などの理由で急速に普及したオフセット印刷は、コロタイプ印刷のような精密度の高い画質は出せないが、コロタイプより耐刷性をアップすることができ、大量印刷を可能とする技術であった。このオフセット機が、1915年においてすでに月份牌の印刷に用いられたかどうかは、資料が不足しているために現時点で明らかにすることはできない。しかし、1916年の『日本印刷界』が紹介している【図6】の月份牌には、先に指摘した

ように、確かに「多色オフセット」の印刷方法が用いられている。【図6】は、まさにこの技術変革の証左となる作品である。この時期から、月份牌の制作は大量生産の方向に向けて大きく前進したのではないだろうか。

次に、「ポスター」。この時期、日本で印刷された月份牌は、「ポスター」という名称で呼ばれている。しかし、この時期の中国においては、月份牌は、今日にいう「ポスター」に相当する「招貼」でもなく、かといって、月份牌の原義の「カレンダー」でもはやなく、名状しがたい、曖昧な表現上の形式ないしは範疇に置かれていた。また一方、当時日本に滞在していた中国人の徐瑾は、『日本印刷界』に投稿した文章「支那一般広告法式」のなかで、当時の中国の広告方式を、おもに「新聞紙面の広告」「招貼と白貼」「鉄道線路の広告と夜間広告」「電柱の広告」「内海航路汽船上の広告」「活動写真と劇場の広告」「雑誌に於ける広告」「店の広告」の8つの種類に分けているが、月份牌については全く言及していない。現在の中国語では、ポスターのことを「招貼」ともいうこともあるが、徐の文章のなかで言及された「招貼」とは、「多くは街道の壁や公衆の共同便所内や城門の前に貼るもので、大抵花柳病に関する広告である、用ふる紙は赤色と黄色と青色と白色との四色に限って居る、勿論文句だけで図案などは全然ないと云つても好い、稀に図案を入れて石版や活字で印刷したものもある、が概ね木版である」²⁸。この「招貼」は、明らかに前述した精巧な月份牌とは別物である。つまり、当時の中国において月份牌は、「招貼」でもなければ、「広告」の一種としても意識されていなかったといえる。そもそも、「ポスター」という概念さえもなかったのである。

さらにいえば、【図5】と【図6】の2枚の月份牌は、日本の同時期の美人画ポスターとは明らかに視点が異なる。日本のポスターでは、美人が大きく描かれているとはいえ、視覚の中心に置かれているのはやはり商品である。他方、【図5】の周が描いた月份牌は、美人が画面の一番重要な位置を占めており、商品は絵の背景に小道具として描かれている。すなわち、周の作品は広告的な要素を最小限にし、装飾的な役割を最大限にしているのである。「広告」と「装飾」のいずれを強調するのかという点において、当時の月份牌と、日本の商業ポスターとでは、明らかに異なっていた。そうであったにも関わらず、日本では、周柏生の月份牌が「広告図案画」として入賞し、加えて、「優秀なポスター」として紹介されたのであった。

当時「広告」として中国では認識されていなかった月

份牌が、なぜ日本にあつては「広告」あるいは「ポスター」の領域におさまっているのだろうか。田島奈都子が『大正レトロ昭和モダンポスター展——印刷と広告文化史』のなかで、当時日本にあつては、目的の異なるふたつの原画募集の懸賞が行われていたことを指摘している。ひとつは、三越呉服店が行っていたような、自社商品を売るためのポスター用原画の懸賞であり、もうひとつは、精版印刷株式会社が行っていたような、第三者に転売できるような作品とそのような絵を描くことができる人材を発掘することを目的とした懸賞である²⁹。周柏生の作品が入賞したのは、後者の懸賞であり、彼の月份牌が中国人の好みに合い、市場に適応していると考えられたがゆえに、授賞が決定されたのではないのかと推測されるし、それゆえに、日本人の目には、周の作品は「広告」であるし、また「ポスター」と呼ぶにふさわしいものであったに違いない。

周の授賞した月份牌は、精版印刷会社が南洋兄弟煙草会社のために印刷した広告のひとつであるが、この作品は、受賞以前にあつて、すでに市場に投入され、広告としての効果を勝ち得ていた可能性もないわけではない³⁰。この事例が指示していることは、周の月份牌は、中国人に好まれて、すでに商品や企業の宣伝の手段に利用されていた可能性があることからすれば、いまだそれが「広告」として中国で認識されることはなかったとしても、実際には、すでに「広告」としての社会的機能を果たしていたといえるかもしれない。

他方、この時期は、企業を介して日本の印刷技術が中国に伝えられただけではなく、多くの中国人留学生が日本に渡り、彼らによって印刷技術が移転された時期でもある。彼らは、日本各地の学校で印刷技術を含む自然科学や社会科学の広い領域において近代的な知識を学んだ。光緒二十二年(1896～7年)に13人の中国人留学生が日本に渡ったのが、近代における日本留学の始まりである³¹。以降、光緒三十三年までの留学者の総人数は1万2、3千人に達した³²。『申報』によると、光緒三十一年(1905～6年)に日本に在学していた中国人留学生の人数は、2,818人であり、日本各地の70校に分布している³³。これらの留学生のうち、卒業後に帰国した者は、朝廷の試験を受け、合格者は科挙試験合格者と同様、「挙人」出身と見なされて、実官に任命された³⁴。

しばらく帰国しなかった者もいた。徐瑾のように、日本の企業に入り、働きながら技術を身につける者も少なくなかった。彼らは、長年日本の有名企業に勤務し、その働きぶりは高い評価を得た。たとえば、『日本印刷

界』は、このような留学生のひとりである沈逢吉に対して、次のような評価を与えている。

沈逢吉氏は上海芸術学校の出身にて殊に彫刻に妙技を有す目下東京凸版印刷株式印刷株式会社彫刻部員として益々其の特技を揮ひつつあり支那人中稀に見る[ママ]前途有望の青年なり³⁵

沈逢吉によれば、彼は凸版印刷彫刻部に配属後、日本人と共に仕事をする事で技術を習得し、さらに他の会社も見学に行くなど日本の印刷業者のさまざまな実態を肌で感じたという³⁶。無論、彼は単に働いただけでなく、自分が日本で見たもの、感じたこと、そして身に付けたものを積極的に中国国内に発信したものと考えられる。沈逢吉や徐瑾は、中国と日本の印刷業界の状況について分析した文章を『日本印刷界』に投稿し、また、徐瑾と劉傳亮は、日本の印刷技術の書籍を中国語に翻訳した。さらに、徐瑾は、大正4年7月に中国に帰り、日本で身に付けた技術と経験を中国で発揮した。『日本印刷界』には、徐瑾の帰国を報じる次の記事が掲載されている。

支那政府より留学生として発見せられ日本にあること十一年東京高等工業学校製版科優等卒業生としてその秀才を認められ特に本誌漢文欄の担当者として尽くすところ尠からざりし同氏は今回支那華商石印局技師長として招聘せられ本月十六日東京駅発帰国の途に着けり、尚ほ帰国後における同氏の支那通信は漢文欄と共に本誌の最も好読物たらんとす氏や前途多幸なれ³⁷

このように、『日本印刷界』という1冊の雑誌に限っても、3人の中国人留学生の名前が登場する。ここで述べられた彼らの活躍は、当時の多数の留学生のごく一部に過ぎないだろう。徐瑾らが翻訳した、柏谷末太郎のような日本の印刷技術者たちが著した書籍は、実際のところどれほど中国の印刷技術の向上に役立ったのかは不明である。だが、少なくとも、当時の日本の最新の印刷事情をリアルタイムで中国に伝えたことは確かである。しかし、残念ながら、彼らの活動と月份牌とを結ぶ資料は、いまだ見出されていない。

3. 商業広告としての絵入り月份牌への発展

月份牌に関する『申報』の資料のなかに大変興味深

いものがある。1910年1月24日の『申報』に、ある詐欺事件に関する記事が掲載されている。

冒領月份牌之禍端

住居西門内之周蓮榮昨將洋文信一封加蓋南京路敦慶隆號圖章，持至九江路ト内門洋城公司索取月份牌。當經該公司飭人至敦慶隆詢無其事，知係冒騙，立即報知總巡捕房，派探鐘星南與一百八十四號西探將周拘住，令周乘坐東洋車前行。詎周情急，在車內取出洋刀自刺喉嚨。迨至捕房，捕頭見周頸內鮮血淋漓辨衣，驗明送至仁濟醫院醫治。旋飭中西包探至城內，在周家抄出敦慶隆假圖章一個，隨即帶回捕房存候解廟訊核³⁸。

月份牌をちょうまかす 災いの始まり

西門の内に居住する周蓮榮は、昨日外国語で書かれた1通の手紙に南京路敦慶隆号の印を押印し、それを九江路にあるト内門洋城公司に持参して、月份牌を請求した。当公司在敦慶隆号に問い合わせたところ、敦慶隆号がそのような手紙を出していないことが判明した。詐欺であることが分かったので、当公司是さっそく総警察署に通報した。探偵の鐘星南と184番の西洋人の警官が周を逮捕し、人力車に乗せて連行した。周は屈辱のあまり、人力車の中で自らの喉をナイフで刺して自害しようとした。警察署に到着後、警官が周の首周りに大量の血を発見し、急いで仁済病院に連れて行った。後に中国人と西洋人の警官は、周の自宅で敦慶隆号の偽印鑑を1個発見し、それを警察署に保管して後日の取り調べに備えている。

この事件はあまりにも恐ろしくかつ奇妙であると感じられよう。周蓮榮がどのような人物であるかは、記事には詳しく紹介されていないが、外国語の手紙が書けることと偽物の印鑑が作れることから、知識人であったと考えられる。中国の知識人であれば、泥棒と見なされることはよほどの屈辱であろう。そのため彼は、警察に連行され、裁判にかけられることよりは、死んだほうがメンツを保つことができると考えたに違いない。しかし、なぜこの人物は、たかが一枚の月份牌を貰うためにこのようなことをしてかしたのであろうか。

前節ですでに分析したように、印刷技術の飛躍的な進歩により、月份牌の印刷の質は一段と向上した。特に1907年以降商務印書館がコロタイプ印刷を輸入し³⁹、

それにより制作された月份牌は、その華美な絵と絢爛たる色彩によって、多くの中国人を魅了した。そのため、ますます多くの企業が月份牌を企業の宣伝に使用するようになった。この時期の『申報』には、月份牌の印刷業務を引き受ける広告が続々掲載されている。1903年から1911年までに『申報』に掲載された広告を見ると、商務印書館以外に彩文五彩石印局や文宝五彩石印局、錦隆洋行⁴⁰などのいくつかの業者が多色月份牌を印刷する業務を扱っていることがわかる。1903年から1911年までに『申報』に掲載された多色月份牌の広告によれば、月份牌の「贈呈」と「印刷」の広告の数は、【表2】のとおりである。

商務印書館は、日本の多色石版印刷技術を輸入して以来、『申報』に幾度も多色月份牌の「印刷」の広告を掲載している。「印刷」の広告の掲載は、商務印書館が一番多かった。一方、【表2】が示すように、1907年以降、「贈呈」広告が「印刷」広告の数を超えている。それらの広告は、ほとんど申報館が出したものであり、内容には、主に他の企業や商社から月份牌を受け取ったことに対する、それらの企業へのお礼を述べたものである。たとえば、1907年2月20日に申報館が出した広告においては、茂生洋行、文宝石印局、何錦豊号等の企業から数枚の多色月份牌を貰ったことが記載されている。同広告においてこれらの月份牌は、「縷金錯采，鮮豔異常」として賞賛されている。類似の内容の広告が1909年に12回も出されているが、これらの企業が多色月份牌を一般消費者に贈呈する広告は一件も見当たらない。それは前節ですでに述べたように、このときの月份牌の印刷技術は、まだコロタイプであったため、質はいいが、数には制限があったためであろう。そのため、大きな企業や重要な取引先、さらには申報館のよ

うなマスメディアに向けた宣伝のためにしか使われなかったに違いなかった。したがって、多色月份牌があまりにも美しくかつ入手困難であったことから、前述のような詐欺事件の悲劇が引き起こされたと考えられるのである。

多色月份牌を一般消費者に贈呈したのは、中法大薬房が最も早い業者であったと考えられる。1910年1月18日の『申報』に、中法大薬房が広告主となった次の広告が掲載されている。

奉送月份牌

本薬房毎歳贈送之月份牌，年盛一年，歳底年頭拒友幾于應接不暇。且即多印至数万紙亦難遍及。今歳因特定新章自十二月初五日始凡至本薬房售药諸君，滿大洋一元起附贈庚戌年西法五彩画飛禽月份牌一張，至贈畢之日爲止。戚友請免索取，謹此預道歉，忱諸惟見諒爲荷。上海三馬路中法大薬房廣告⁴¹。

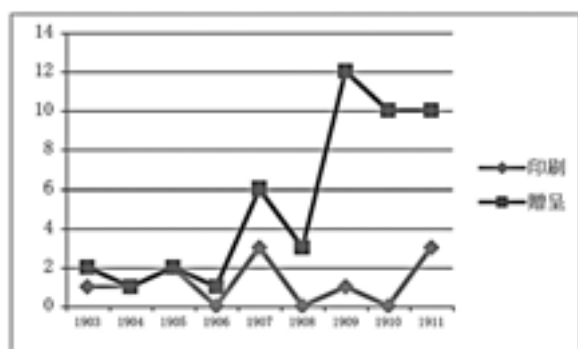
月份牌贈呈

当薬局が毎年贈呈する月份牌は、年々盛んになって、年末年始には大忙しです。数万枚を印刷しても足りない状態です。そのため今年は改めて規則を作り、十二月五日以降、当店で一元以上の品物をお買い上げいただいた方に、西洋技法で描いた極彩の鳥の絵の庚戌年月份牌一枚を差し上げます。贈呈は月份牌が無くなり次第終了します。申し訳ございませんが、当店の親戚と友人の方々による月份牌のみの請求はご遠慮ください。上海三馬路中法大薬房広告。[広告3]

中法大薬房はこの広告のなかで、同社が毎年印刷する月份牌が数万枚を超えたと記述しているが、これはきわめて信憑性が低く、おそらくは広告の効果を上げるために誇張した数字を挙げたのだろう。とはいえ、この広告は明らかにすでにこの段階で、中法大薬房によって多色月份牌が一般消費者に贈呈されていたことを伝えているのである。

中法大薬房は、光緒十六年(1890年)に上海のフランス租界に創建された⁴²。創設者の黄承乾は、もうひとつの名を楚九といい、号は礎玖で、同治十一年三月初二(1872年4月9日)に妾の子として浙江余姚に生まれた【図9】。15歳の時に父が他界した後、母親と上海に移住し、家伝の医学を活かして薬の製造と販売を行う⁴³。

表2 1907年～1911年の『申報』における月份牌の広告数の推移



(執筆による作成)

1890年、彼は自らが経営する薬局、頤寿堂をフランス租界に移し、中法薬房(Great Eastern Dispensary)と改名し、西洋薬の販売をし始めた⁴⁴【図10】。中法大薬房は、おそらく黄楚九の最初の事業であった。その後、彼は、五洲大薬房や新新舞台、大世界、樓外樓、新世界、大昌煙公司等、さまざまな領域の企業を経営するようになった。彼は、商品の販売に独特な方法を用いた。中国の商人らがまだ「酒香不怕巷子深(酒が良ければ売の場所が辺鄙にあっても構わない)」という諺を信じ、宣伝を軽視していた時代に、黄楚九はすでにさまざまな広告手段を使い、積極的に商品を販売することを試みたのである。1904年に生み出した保健薬は、「艾羅補腦汁(Yale Stimulant Remedy)」と命名し、雲獅のマークとDr. TC. Yalesの英文を商標に入れた【図11】。Dr. TC. Yalesは、実は製造者の黄楚九の名前の英語表記である。彼はまた商務印書館に頼んで、精美なパッケージと説明書を印刷した⁴⁵。当時の中国には、国民全体に舶来品を崇拝する傾向があったため、黄は、頻繁に新聞広告を掲載して、「艾羅補腦汁」を外国最新処方舶来品として大々的に宣伝したのであった【図12】。次いで1907年には、日本の森下製薬の人気商品の「仁丹」と同じ効用の薬を作り出し、「龍虎標人丹」と命名する。「仁丹」と「人丹」は、中国語の発音が同じ「RenDan」であり、文盲の多い中国消費者には殆ど区別がつかなかった。そのうえ、黄は、外国商品排斥運動の波に乗り、「人丹」の広告においては「完全国貨」のスローガンを打ち出した。森下製薬は、「人丹」が「仁丹」の偽物であるとして起訴するが、黄は逆にそれを利用して、「人丹」の影響のさらなる拡大を成し遂げる。裁判は10年以上続いたが、最終的には「人丹」の勝訴で終止符が打たれた【図13】【図14】。その期間中、黄は、薬局を何度も引っ越ししている。店の外装をますます豪華にしたり、大きな看板を出したり、政治が変動するたびに、政局のニュース記事を装った広告を掲載したり⁴⁶、あらゆる広告手段を用いて、絶えず新鮮な感覚を人々に与えた。また、薬局だけではなく、娯楽界、金融界、そして実業界にも進入し、いくつものクラブ、劇場、銀行、煙草会社などの企業を設立している。それらの商売は、黄楚九に莫大な富と「百家經理(百業の社長)」のあだ名をもたらしたが、同時に、その破天荒な営業手段によって、「滑頭商人(海千山千商人)」であるとの評判も招いた⁴⁷。

こうして黄楚九は、特に月份牌という広告媒体に着目し、当時一般人が入手し難い多色刷りの月份牌を彼

が真っ先に消費者に贈呈した。しかし彼は、ただ単にすでに作られた月份牌をそのまま使うだけではなく、表現や使用方法において常に新しい月份牌を追求していた。たとえば、1907年2月18日付の『申報』に掲載された次の広告は、その試みのひとつである。

新年贈彩元宵為止

歳事更新，椒花口瑞，無論官学紳商界互相恭頌皆徒示虚文而已，今本藥房特創贈彩賀禧一例，可知本藥房主人逐事逐件无一非实事求是。凡賜顧諸君，向本藥房購貨，自数角起至一二元者，隨口九芝堂新民小説日記簿一本，至数元者隨口十九樣彩色月份牌一幅，至十元外者隨贈玫瑰香水一瓶、香皂一塊、月份牌一幅、日記簿一本。月份牌上有衛生測候花兩盆，能變五色，如家置一幅，可以知歲時節氣，亦可作晴雨表觀。此之謂商界中特別恭禧也。

上海三馬路中法大藥房謹啓⁴⁸

新年贈呈十五日まで

新しい一年が始まる時には、官、学、商、紳の各界の人々は、互いに新年のあいさつをしますが、それらは煩わしくて意味のない儀礼に限られています。今は、当薬局は新年のあいさつ代わりに新しく贈呈のイベントを行います。これで当薬局の主人が実務に励むことがわかるでしょう。当薬局で品物をお求めの方に、もれなく贈品を差し上げます。数角から1、2元までの者には、九芝堂新民小説手帳1冊、数元の者には19種類の月份牌のなかから1枚を贈呈、10元以上の者には、薔薇の香水1瓶、石鹼1つ、月份牌1枚と手帳1冊を贈呈します。月份牌には、衛生測候花2鉢が描かれています。それは5色に変化し、もし家にこれ1枚を置いたら、日にちや年間行事がわかるだけではなく、バロメーターとしても使えます。これこそが商業界の特別な新年あいさつです。[広告4]

この広告で贈呈された月份牌は、とても奇妙なものであり、何と色彩だけではなく、天気によって変色することもできるようである。中国においては、このような天気を予知する絵は、古い伝説のなかの仙人の家にしかないものである。こんな珍しいものをただ何元の薬を買ったらもらえるとは、とんでもなくいい話ではあるが、もしこの広告の記述に嘘がないとすれば、その月份牌

を印刷するときに使ったのは特殊なインキで、湿度の変化によって変色するものだったのかもしれない。いうまでもなくこのインキは、当時ではとても目新しくて新奇なものであった。このように絶えず新しいものを積極的に活用して、黄楚九は、常に消費者の好奇心を引き寄せ、商品をうまく宣伝していたようである。1914年、彼はまた、月份牌に新たな変革を起こすひとりの画師を起用した。その人は、月份牌の発展に重要な貢献を果たした鄭曼陀という画師であった。

鄭曼陀、名を達、字を菊如といい、杭州の出身であった。彼は、小さい頃から目に病があり、体が弱かった。それでも彼は絵を描くことを愛し、努力を重ね、弱冠14歳にしてすでに絵の才能が認められた。彼は、杭州の育英学院で英文を修めたことがあり、西洋画法の習得に有利な条件となっていた。また若い時に写真館で「写真画」を描いたことがあり、そのことが後の彼の創作スタイルに大きな影響を与えた⁴⁹。1914年黄楚九は上海南京西路の「張園」で鄭が描いた4枚の仕女画を見て、すぐにもその絵を買って、中法大薬房を宣伝する月份牌に用いた。その後、鄭は中法大薬房のために次々と月份牌を描いた。彼が描いた月份牌は、顧客の間で好評となり、彼自身も月份牌の新しい人気画師となったのである⁵⁰。

鄭曼陀は、水彩画と写真画の両方の技法を融合し、新しい技法を作り出した。その技法とは、まずカーボンを使い、描いた人物に明暗を付け、顔の立体感を作り出した。その上に、透明な水彩色を施し、色を付ける方法である。この方法で描かれた人物は、それまでの伝統技法と違い、より鮮明で鮮やかであり、人物の皮膚が軽くて軟らかく感じられる。このように描かれた月份牌は、伝統仕女画のように綿密でありながら、西洋画のように立体感を有している。この技法は、「擦筆水彩技法」と名付けられ、後に月份牌名画師の杭稚英によって習得され、広く月份牌制作に用いられて、その特徴的な技法となった【図15】。

鄭曼陀が描いた月份牌は、高い評価を得て、消費者に大変好まれた。1910年代半ばの『申報』の月份牌の広告を見れば、鄭曼陀が描いた月份牌はいかに人気があることがわかる。【図16】は1916年1月1日の『申報』である。新聞の半版を占めるこの広告コーナーには、8つの広告が掲載されている。そのうち、3つの異なる商品の広告に「鄭曼陀が描いた月份牌を贈呈する」に相当する文句がある。鄭曼陀を杭州の写真館で遺影を描く無名の画師から、大上海における一番人気の月

牌画師にしたのは、まさに黄楚九であった。中法大薬房の商品もそのおかげで飛ぶように売れた。これも黄楚九の広告商法のもうひとつの成功例となった。黄楚九に対する評判は褒貶相半ばであるが、彼の成功がほかの商人たちの憧れになると同時に、彼の広告に対する考え方がそれらの商人に良い刺激を与えたことは確かであろう。『申報』に掲載された多色月份牌の贈呈広告や鄭曼陀の起用などは、まさしく彼の先進的な広告思想を体現したものであった。こうして月份牌を用いて手に入れた商業的成功は、他の企業や商人によって次々と真似られることになり、多色月份牌が広く商品のおまけとして利用されていくようになった。黄楚九は、近代中国における成功した商人というだけでなく、その抜きん出た考えによって、中国近代広告の新たな地平を切り開いた人物でもあった。こうして、月份牌が商業用のポスターとして、より効果的に利用されるようになり、ついには一段と幅広い普及へと繋がっていったのである。

4. おわりに

月份牌は、歴史の舞台に登場して以来、最初に商品として売られ、その後、他の商品（ルソン票、『申報』など）のおまけや付録にされていた。石版印刷の使用は、おまけとしての月份牌にルソン票の偽物防止の役割を担わせた。そして、1905年、商務印書館が日本の金港堂との合弁によって、多色石版印刷技術を移入し、さらに、1915年にアメリカからオフセット印刷機を購入した。それらのことによって、より精巧で、より低コストの大量生産のための技術が進歩し、月份牌の発展が大きく加速されていった。さらにこの時期、黄楚九のような企業家にとって、広告に対する関心が日に日に高まっていった。こうして月份牌は、広告として、より幅広い発展の道が可能となり、大衆にとって身近な存在となり、また、さまざまな階層の人の目に触れる存在へと変わっていった。そしてさらには、手軽で有効な広告になるにつれて、もっと大衆の注目を引くために、月份牌の表現する内容も、もっと大衆の関心を引くようなモチーフを必要とするようになっていった。まさしくその時、社会に進出するようになったばかりの新しい女性たちに視線が向けられたのである。

この論文に続き、次の研究においては、月份牌に描かれたモチーフが伝統的なテーマから美人画へと変容した社会的背景を探究することにより、女性の社会進出の実態についての一端を明らかにしたいと思っている。



図1 当時の上海の共同租界地を示す地図の一部。赤で囲んだ境界が「斎斎哈爾路」で、当時の精版印刷株式会社の上海工場のあった所ではないかと思われる。



図2 精版印刷株式会社の社史に見られる「ポスター類」。ここでは、南洋兄弟煙草有限公司の社名が入った、右上の月份牌も「ポスター」として扱われている。



図4 中山太陽堂の「雙美人牌香蜜粉」月份牌。精版印刷株式会社によって印刷されたことが、小さく右下に書かれている。



図7 コロタイプ印刷による月份牌。



図15 李慕白と金雪塵によって描かれた《秋艷図》。鄭曼陀が編み出した「擦筆水彩法」の描写の手順を示している。



図3 精版印刷株式会社の「意匠室」。左端のイーゼルに掛けられているものが、月份牌の原画ではないかと思われる。



図5 日本精版印刷合資会社の第2回広告図案懸賞募集において第3等第1席を受賞した周柏生の月份牌。



図6 『日本印刷界』に掲載された月份牌。

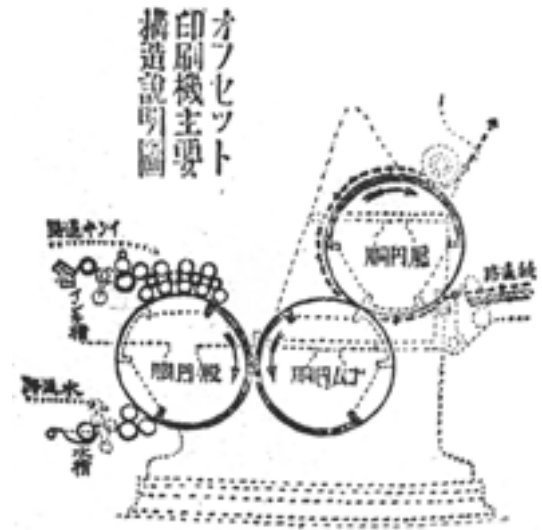


図8 当時のオフセット印刷の仕組みを図解したもの。



図9 青年時代の黄楚九。



図10 初期(1890年代頃)の黄楚九の中法大藥房。



図11 黄楚九が発案した保健薬「艾羅補腦汁」の商標。



図13 森下「仁丹」の広告。



図12 中法大藥房の「艾羅補腦汁」の新聞広告。



図14 龍虎「人丹」の広告。



図16 鄭曼陀が描いた月份牌を贈呈することを告知している『申報』(1916年)の広告欄。「小説新報」「上海国華書局」および「眉語」のなかに「鄭曼陀」の名前を見ることができる。

図版出典

- 図 1 『上海老地図系列・上海1932(複製版)』 中華地図学社、2006年。
- 図 2, 3 『精版印刷株式会社ノ現況』 精版印刷株式会社、昭和9年。
- 図 4, 7 趙青岩(中国山東省龍口に在住)の個人所蔵作品。
- 図 5 『日本印刷界』第77号。
- 図 6 『日本印刷界』第88号。
- 図 8 大宮昇『絵画と印刷』 合資会社光文社、昭和19年、19頁。
- 図 9, 10, 11 曾宏燕『上海巨商黄楚九』 人民文学出版社、2004年。
- 図12, 13 1913年11月5日『申報』。
- 図14 由国慶『再見老廣告』 百花文芸出版社、2004年、51頁。
- 図15 年欣『上海月份牌年画技法』 上海人民美術出版社、1984年、附図。
- 図16 1916年1月1日『申報』。

注

- 1 田島奈都子編集『大正レトロ昭和モダンポスター展——印刷と広告の文化史』図録、姫路市立美術館、154頁。
- 2 ほかの出資した5人は徐桂生、張蟾芬、鮑咸昌、高翰卿、郁厚坤である。高翰卿「本館創業史——在發行商所学生訓練班的演講」『1897～1992商務印書館九十五年——我和商務印書館』商務印書館、1992年、2頁。
- 3 教科書問題が日本で発覚したのは、1902年(明治35年)の秋。同年12月17日、当局は金港堂を含む20ヶ所以上を一斉に捜査し、原亮一郎らを検挙した。そのわずか10日後、『申報』はその事件を記事にした。『申報』における日本の「教科書事件」についての報道は、1902年12月26日(光緒二十八年十一月二十七日)から、1903年2月8日(光緒二十九年正月六日)までおよそ1ヵ月半にわたり、記事と社説を合わせて計11回に及んだ。そのうち、金港堂の社名が出たのは、1902年12月26日、同年12月28日、1903年1月8日、同年1月16日の計4回であり、原亮三郎、亮一郎らの重役の実名が出たのは、1902年12月26日、1903年1月4日、同年1月8日、15日、16日の計5回であった。
- 4 日本側は金港堂として合併に参加したのではなく、実際は、原亮三郎、原亮一郎、山本条太郎、加藤駒二など金港堂の関係者が個人として出資したのである。そのため、厳密に言えば、この合併は金港堂と商務印書館との合併ではなかった。
- 5 高翰卿「本館創業史——在發行商所学生訓練班的演講」『1897～1992 商務印書館九十五年——我和商務印書館』商務印書館、1992年、9頁。
- 6 同上。
- 7 同上。

- 8 1905年2月11日、光緒三十一年正月初八日付『申報』。
- 9 賀聖鼐「三十五年来中国之印刷術」『最近三十五年之中国教育』1931年版商務印書館——『民国叢書』編輯委員会編『民国叢書』第二編 45巻、文化・教育・体育類、上海書店、1990年、189頁。
- 10 同上。
- 11 同上。
- 12 同上。
- 13 同上。
- 14 同上。
- 15 大澤克、中田良夫「上海の一瞥——商品とレットルと広告・支那人の気風と印刷」『日本印刷界』第69号、大正4年7月、40頁。
- 16 同上。
- 17 本社特派員「支那印刷業の現況(一)」『日本印刷界』第48号、大正2年10月、56頁。
- 18 『精版印刷株式会社ノ現況』精版印刷株式会社、昭和9年、1頁。
- 19 昭和十九年凸版印刷株式会社により合併され、凸版印刷株式会社の大阪支社及び大阪工場となった。教育社『会社早わかりシリーズ・40・凸版印刷』株式会社教育社、1983年10月、10頁。
- 20 同上、6頁。
- 21 『精版印刷株式会社ノ現況』精版印刷株式会社、昭和9年、1頁。
- 22 同上、9頁。
- 23 陳超南、馮懿友『老広告』上海人民美術出版社、1998年、12頁。
- 24 1911年10月18日付「申報」。
- 25 寺本美奈子「大正昭和期初期の平版印刷技術革新——ポスター印刷の基礎」田島奈都子編集『大正レトロ昭和モダンポスター展——印刷と広告の文化史』図録、姫路市立美術館、47頁。
- 26 張樹棟、龐多益、鄭如斯等『中華印刷通史』財團法人印刷傳播興才文教基金會、1998年10月初版電子版、第十三章第二節。
http://33.cgan.net/book/books/print/g-history/big5_12/13_2.htm#1323
- 27 寺本美奈子「大正昭和期初期の平版印刷技術革新——ポスター印刷の基礎」田島奈都子編集『大正レトロ昭和モダンポスター展——印刷と広告の文化史』図録、姫路市立美術館、47頁。
- 28 徐瑾「支那一般広告法式」『日本印刷界』第73号、大正4年11月、28頁。
- 29 田島奈都子編集『大正レトロ昭和モダンポスター展——印刷と広告の文化史』図録、姫路市立美術館、107頁。
- 30 実際、周の作品は中国の市場の好みに適合していた。そのことは、精版印刷会社と南洋兄弟煙草との関係からある程度例証することができる。中田祐夫の回想録によると、彼の父、中田熊次が中田印刷所と精版印刷会社の社長を兼任していた際、中田家は南洋兄弟煙草会社の社長である簡照南の一家と親交を持っていた。簡照南は中国人資本家であるが、一時期日本国籍を有していたことがあった。このことは、後に中国で日本製品排斥運動が生じたとき、南洋兄弟煙草会社の製品が排斥される理由となり、それにより営業が大きな打撃を受け、中田印刷所と精版印刷会社も中国での仕事が激減し、ついには中国から撤退して、最終的には凸版印刷と合併した。これらの事実から、精版印刷が南洋兄弟煙草会社からいかに多大な注文を受けていたかが想像できる。南洋兄弟煙草会社の製品の売りに比例して、中田印刷所と精版印刷会社の事業も繁盛していったに違いない。つまり、中田印刷所・精版印刷会社は、南洋兄弟煙草会社と唇齒の関係にあった。
- 31 舒新城編『近代中国留学史』1939年中華書局版より影印、上海文化出版社、1989年、22頁。
- 32 「学部奏咨輯要・第1編」十洲古籍書畫社編『中国近代教育史料匯編・晚清卷』全国図書館文献縮微複製中心、2006年。
- 33 「調査留学日本人数表」『申報』1905年9月22日、第2版。
- 34 舒新城編『近代中国留学史』1939年中華書局版より影印、上海文化出版社、1989年、279頁。
- 35 沈逢吉「日本印刷業者への希望」『日本印刷界』第72号、大正4年10月、44頁。
- 36 同上、44-45頁参照。
- 37 「徐瑾氏の帰国」『日本印刷界』第69号、大正4年7月、52頁。
- 38 1910年1月24日(宣統元年十二月十四日)付『申報』。第二張第三版、「本埠新聞」。
- 39 賀聖鼐「三十五年来中国之印刷術」『最近三十五年之中国教育』1931年版商務印書館——『民国叢書』編輯委員会編『民国叢書』第二編 45巻、文化・教育・体育類、上海書店、1990年、189頁。
- 40 錦隆洋行は、月份牌印刷業務を受け取る広告ではなく、1905年9月22日の『申報』に出したのは、“五彩人物月份牌”の絵師を招聘する広告である。
- 41 1910年1月18日(宣統元年十二月初八日)付『申報』。
- 42 曾宏燕『上海巨商黃楚九』人民文学出版社、2004年、63頁。
- 43 同上、39頁。
- 44 同上、64頁。
- 45 同上、81頁。
- 46 1911年の10月10日、湖北省の武昌で革命派の軍隊が蜂起し、辛亥革命が始まったばかりであった。各新聞紙の報道の焦点は、すべて湖北省の軍事動静であって、読者も毎日最新の革命の情報を求めている。黄楚九は、この機に乗って、広告のタイトルに「湖北」の文字を入れて、新聞記事のような広告文句を使って、人々の目を引いて中法薬房の商品を宣伝していた。1911年10月17日付の『申報』の第二張第一版に、「湖北伝来之報告」というタイトルの文章が登載されている。その内容は、「(陰曆)八月二十三日漢口中法薬房の報告によると、地方が平靖し当薬房は営業上に影響がうけていません。ただ昨日の正午、多くの人が当薬房

の前で集まり、部外者は何らかの危険でもあったと思いました。実は、『哈麦腦血』という新薬が届いたため、みんなが争って見ていたのです。その後、大変売れました。誤解を招かないようにここでお知らせを。」

- 47 曾宏燕『上海巨商黄楚九』人民文学出版社、2004年、374頁。
- 48 1907年2月18日(光緒三十三年正月初六日)付『申報』、第五版。
- 49 鄧明『最後一瞥・老月份牌年画』上海画報出版社、2003年、127頁。
- 50 大澤克、中田良夫「上海の一瞥——商品とレッテルと広告・支那人の気風と印刷」『日本印刷界』第69号、大正4年7月、17頁。

■執筆者について

于曉妮(う・しょうに)

中国山東省青島市出身。2003年、浙江工程学院(現浙江理工大学)服装芸術学部卒業。2008年、神戸大学大学院総合人間科学研究科博士前期課程修了。現在、神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士後期課程在籍。表現文化論専攻。

E-mail:haidy@hotmail.co.jp

■Notes on the Contributor

Yu Xiaoni was born at Qingdao city Shandong prefecture of China. She graduated from Zhejiang Sci-Tech University in 2003. And she was given a M.A. degree at Kobe University in 2008. She is now a doctoral candidate at Kobe University.